

大学の世界展開力強化事業
(平成24年度採択)
平成25年度フォローアップ結果について

大学の世界展開力強化事業プログラム委員会
平成26年3月12日(水)
独立行政法人 日本学術振興会

■フォローアップの目的

「大学の世界展開力強化事業」の適正な事業管理を行うとともに、各大学における円滑な事業実施の支援、事業成果の還元のため、毎年度各大学の取組の進捗状況を確認するフォローアップを行う。

【参考：大学の世界展開力強化事業公募要領（抜粋）】

6. その他

(2) 事業の評価等

毎年度のフォローアップ（後述の「中間評価」実施年度は除く。）、支援開始から3年目に平成25年度までの取組状況に関する中間評価、支援終了後（支援開始から6年目の平成29年度）に支援期間全体の実績に関する事後評価を実施し、毎年度のフォローアップ及び中間評価の結果は、補助金の配分に勘案されるとともに、事業目的、目標の達成が困難又は不可能と判断された場合、事業の中止も含めた計画の見直しを行うことがあります。

また、評価等については、委員会で定める評価方法、基準等に基づいて行われます。

■ スケジュール

- ・平成25年11月14日
大学の世界展開力強化事業プログラム委員会において、フォローアップ実施に係る審議、決定
- ・平成25年12月12日
フォローアップ実施について文部科学省から各採択大学に通知
- ・平成26年2月3日～2月5日
各採択大学からフォローアップ調査票の提出
- ・平成26年3月12日
大学の世界展開力強化事業プログラム委員会にフォローアップ結果の報告
- ・平成26年3月下旬
フォローアップ結果の公表

■フォローアップの総括

平成24年度に採択された14件のプログラムについて、採択時の構想の各観点における進捗状況、特記すべき事項や構想時に設定した達成目標に対する平成24年度実績(派遣・受入の学生数)等のフォローアップを行った。

事業全体では、派遣学生数は達成目標を上回っているものの、受入学生数は達成目標を下回っているが、これはフォローアップの対象が平成24年度(採択初年度)のみであり、実質的な事業実施期間が短かったことなどが影響しているためであると言える。

各プログラムの取組、派遣・受入の進捗状況や成果等を見ると、それぞれのプログラムの目的や特色等を反映した取組が行われ、一部には当初計画を上回る成果が出ている事例もある。また、プログラムの効果が当該大学の他部局や大学全体に波及している事例も報告されている。

プログラムを進めていく中で、課題や問題点も浮上してきているが、各採択大学はその対応や解決に努めており、すでに翌年度の取組でそれらの課題をクリアしているプログラムもある。

今後も、本事業の趣旨に則り、各プログラムがさらに充実し、成果を挙げられることを期待する。

1. 取組の進捗状況

「大学の世界展開力強化事業(平成24年度採択)平成25年度フォローアップ調査票」(以下、調査票とする)による各採択大学からの回答に基づき、下記①～④の各観点における「優れた取組」や「課題等」について、抽出・整理を行った。

- ①交流プログラムの内容
- ②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成
- ③外国人学生の受入れ及び日本人学生の派遣のための環境整備
- ④構想の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

①交流プログラムの内容

【優れた取組(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- 派遣学生の日本とASEANの結びつきに関する知識・理解を向上させるため、ASEAN各国における日本政府の国際協力支援を学ばせ、学生は派遣中、各国の日本大使館、裁判所、司法省、JICAの法整備支援等に関するプロジェクトオフィス、法律事務所、日系企業などを訪問した。
- タイ、インドネシア、ベトナムからの学生を2週間同時に受け入れ、英語による研修プログラムを実施し、日本を含めた4か国の学生による実技コンテストなどを開催した。また、4か国の学生と教職員が寝食を共にし、密度の高い研修・交流を行う3日間のグローバルリトリートを開催した。
- iPadなどのICT機器の活用をはじめとするアクティブラーニングの手法を採用したことにより、地域の課題と資源を発掘する際に学生の主体的な学びを引き出すことができた。また、受入地域の住民との交流を通じた学びも促すことができ、地域住民にも自らの資源と課題について再認識をする機会を提供することができた。
- 派遣・受入学生に、プログラム参加期間中に研修内容についてのポートフォリオ提出を義務づけ、研修に対するアンケートも実施した。そこで得られた学生からのフィードバックを、研修プログラムの新規企画や研修内容の修正を行う際に活用し、より魅力あるプログラムを提供すべく努めた。

【課題等(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- プログラム開始可能時期が遅れたため、予定していた学生数の派遣ができなかった。
- タイの大学への派遣の一部については、政情不安のため、渡航の延期・中止を余儀なくされた。

②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

【優れた取組(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- 各連携大学の担当者が一堂に会する実務担当者会議を定期的を実施し、質の保証を伴った大学間交流の枠組みについて統一的な認識を持つとともに、交流プログラムを魅力的にする提案を行い、学生の派遣時期・期間、派遣期間中の実施カリキュラム、参加学生のケア、事業評価等の諸条件について意見交換を行うなど、具体的な議論を行った。
- 共同授業などは連携大学教員を非常勤講師として任用することにより、各大学の所定の手続きで単位認定できるようにしている。また、大学院ダブルディグリー協働教育プログラムには、各連携大学の教員が参画するため実質的な単位認定ができ、それに基づいて各連携大学の修了認定単位への組み込みや連携大学での共同修了証授与も可能としている。
- 参加学生の選考について、海外連携大学に選考基準を提示した上で、各大学の責任で派遣に適した人材を決定した。
- 当該大学とASEANコア大学内に教職員一体の支援組織としてCampus ASEANオフィスを設置した。
- 外部評価委員(米国、オーストラリア、タイ、日本)と学内の評価委員で組織された評価委員会により、本事業のプログラムを評価し、プログラム改善のための助言・提言を行っている。

【課題等(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- プログラムの実施にあたり、単位制度・教育制度の違い、遠隔授業の環境確認など大学間での十分な議論が必要となり、問題点等について連携大学とともに洗い出しを始め、翌年度以降の実用に向けて動き出している。

③外国人学生の受入れ及び日本人学生の派遣のための環境整備

【優れた取組(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- 大学にプログラムのセントラルオフィスを設置し、各海外連携大学にリエゾンデスクを設置して担当者を配置し、両デスクが必要に応じてオンライン会議システム等を利用して情報を共有する環境を整えた。このことにより、学生に対する留学前から留学後に及ぶ事務、学修、生活に関するワンストップサービスを各大学で提供する体制が整った。
- コンソーシアム大学間の教員、学生、事務担当者が、共通メーリングリストやFacebook、Twitter、インターネット上のフリークラウドなどを利用し、様々な形でコミュニケーションが取れるような体制を築いた。
- 部局間の協働により、長年懸案であった教務システムの日・英バイリンガル表記に着手し、全ての留学生が自らシステム上で履修登録及び履修状況の確認が行える環境を整備した。
- ビザの手続き、来日時の空港等での出迎え、住居の手配などを包括的にサポートし、外国人留学生の一元的な在籍管理、外国人登録や銀行口座開設等、当面の生活の立ち上げに必要な手続きを支援するなどのワンストップサービスを実施している。

【課題等(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- 受入宿舎の不足を少しでも解消するため、大学本部主導で自治体・民間との連携を強化し、改善に向けて動いている。

④構想の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

【優れた取組(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- プログラム用のwebサイトを作成・公開し、プログラムの内容、教育課程の内容、関係科目のシラバス、単位の互換や認定方法、留学先の生活情報、学生の募集案内、セミナーやシンポジウムの開催案内、報告書等による成果の報告等を日本語及び英語(必要に応じ各国語記載)で公開し、学生への周知と成果の普及に努めた。
- プログラムの内容と魅力を学生目線で情報公開するために、留学中の学生が英語で記事を投稿できるブログを立ち上げた。これは、プログラムの参加希望者に向けた広報になると同時に、留学中の派遣学生及び受入学生が励まし合い情報を交換する場として、さらには保護者が子どもの勉学の様子を知る場として機能した。
- 大学の国際化においてブランド・マネジメントは重要な活動のひとつであるとの認識から、ブランディングの確立を進め、プログラムのロゴ・デザインを作成し、あらゆる場で使用した。
- 学内のプロジェクト組織などと連携することにより、ASEAN全域の大学・研究機関、インターンシップ受入企業などに対してプログラムのコンセプトやコースの紹介などを行ったほか、ASEAN地域への展開を図る日本企業や当該大学同窓会組織に対して、本事業の広報を幅広く行い、事業推進への理解と協力の要請・周知を図った。

【課題等(各大学のコメントより抜粋、要約)】

- 成果の普及は今後の課題であり、将来的には、派遣された学生達に学生の公募説明会などの場において留学経験の発表をしてもらうことなどを検討している。

2. 特筆すべき成果等

調査票による各採択大学からの回答に基づき、特記すべき事項等の中から「特筆すべき成果等」について、抽出・整理を行った。

- コンソーシアムの各メンバー大学の副学長が集まり、憲章の策定、協働FDの実施、リエゾンデスクの設置、学生の試行的派遣・受入を通じて、ミッションを共有すると同時に等しく役割を担おうとする意欲と環境を、整えていった。また、学問分野が異なる学生を一同に集めて教育するPARE共通科目の単位を、各大学・各大学院が単位認定するための質の保証を「アウトカム・ベースド・ラーニング」の考え方で行っていくことについてコンセンサスを形成し、関連するFDを続けていくこととなった。(申請区分 I : 北海道大学)
- 学生が歯科専門用語を共通理解し、研修が円滑に実施できるように英語・日本語・タイ語・インドネシア語・ベトナム語の5か国語による「基本歯科用語集」を作成して配布し、学生からのフィードバックを受けた。また、日本人学生に、来日する外国人学生の学習支援や生活支援を積極的に体験する機会を提供し、プログラム開催時に学生にも企画や運営の補助をさせることで、様々な医歯学領域の学生や研究教育者と国際交流できる機会を設けた。今後、国際医療・歯科医療ネットワークの構築のためには、コンソーシアムを超えた他国の学生・教員、また日本の他大学に在籍する学生に対しても、参加できる機会を提供することが重要と考えている。(申請区分 I : 東京医科歯科大学)

○平成24年度に3か月間インドネシア大学に本プログラムによって派遣された大学院博士課程学生が、優秀な成績により大学院を早期修了し、平成26年度より本プログラムの特命助教（教育推進員）として採用され、本プログラムに参加することになった。（申請区分Ⅰ：○神戸大学、大阪大学）

○本学において、日本やASEAN地域で事業を営む企業を参加メンバーとした産学連携研究コンソーシアムを正式に立ち上げた。企業にとっては日本・ASEAN諸国の優秀な学生の確保につながり、本事業終了後の財源確保にもつながる。（申請区分Ⅰ：慶應義塾大学）

○平成25年5月に、タイ・バンコクに50名規模の教室1室および20名規模のセミナールーム・会議室4室を備えた海外教育拠点「明治大学アセアンセンター」を設置し、コンソーシアム参加校の学長など代表者が一同に会して日本ASEAN間の学生交流について議論するセミナーの開催、本学学生と現地連携校学生との共同ワークショップの実施、本学教員が現地連携校学生に対して日本理解促進を目的とする実験的な遠隔授業の実施、現地講師が本学学生に対してタイ語や現地理解促進のため行う実験的な遠隔授業の実施、現地留学中の本学学生が現地高校生に対して行う日本語・日本理解促進活動（SEND）の実施といった活動を行ってきている。（申請区分Ⅰ：明治大学）

○各大学代表が全員参加したシンポジウムを通じて、名古屋大学が日本のモノづくりの産業基盤に立脚した研究拠点であるという認識が高まり、海外連携大学より本学に派遣する留学生のインターンシップを含む実地教育をモノづくりの現場にて実施するよう強い要請を受けた。これを実現するために、モノづくりの中でも特にASEANに拠点を持つグローバル企業と交渉し、まず短期受入学生に対する工場見学、本学学生、従業員によるグループ討議、価値創造などを含むセミナー開催が決定した。また、これまで欧米に偏っていた学生の留学への意識がASEAN諸国にも向けられるようになり、SEND長期派遣へ申し込む学生が増えた。

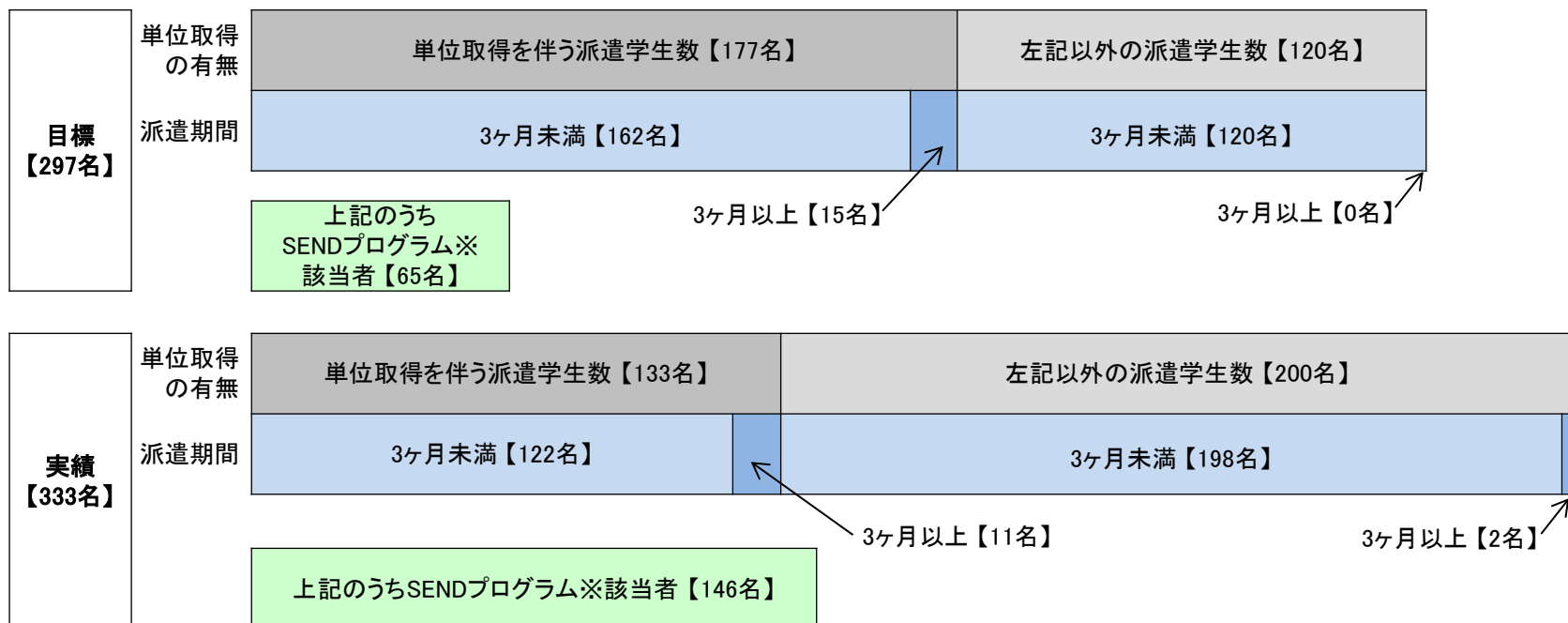
(申請区分Ⅱ：名古屋大学)

○海外連携大学からの要望により、連携大学4校の学生と本学の学生との研修計画をしており、今までの本学と各連携大学のバイラテラルな交流から新たにマルチラテラルな交流の実現を試みる。また、派遣学生の現地日系企業でのインターンシップ研修において、実際に現地で活躍する日本人社員と学生が直接交流することで、海外で働くことへの意欲や関心を高めることができた。本プログラムは、交流プログラムに繰り返し参加することにより学生の意欲や能力等が向上していくスパイラル型の教育モデルを特長としており、その成果としてショートターム派遣プログラムに参加した学生が、平成25年6月にカンボジアで開催された「国際世界遺産ユースフォーラム」の日本代表として選抜され、平成25年8月から12月までセメスター派遣プログラムでシンガポール国立大学へ留学した。(申請区分Ⅱ：九州大学)

3. 交流学生数の実績(1)

(1-1) 交流プログラムで海外に留学した日本人学生数(派遣学生数)について【全体の状況】

達成目標に対する実績の割合は112.1%



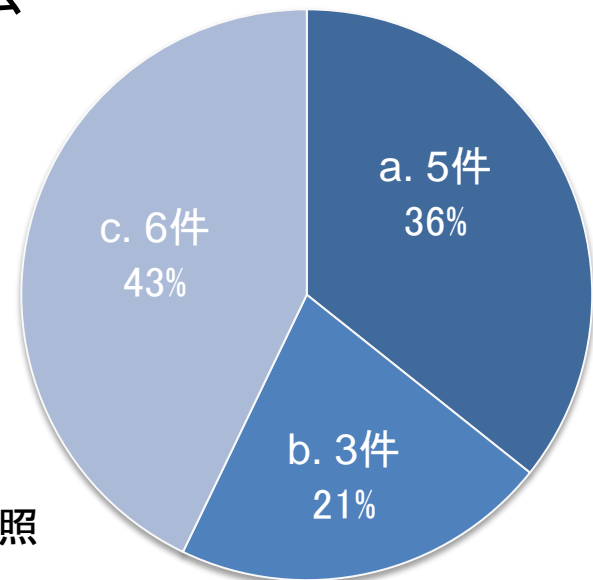
※SENDプログラム: Student Exchange - Nippon Discovery

本事業のうち、日本人学生が留学先の現地の言語や文化を学習するとともに、現地の学校等での日本語指導支援や日本文化の紹介活動を通じて、学生自身の異文化理解を促すことを海外留学の目的の一つとして位置づけ、将来、日本とASEANとの架け橋となるエキスパート人材の育成を目指すもの

(1-2) 交流プログラムで海外に留学した日本人学生数(派遣学生数)について【各プログラムの状況】

達成目標に対する実績の割合が

- a. 200%以上だったプログラム
(平成24年度の派遣計画はなかったが、実績のあった1プログラムを含む)
- b. 100%以上200%未満だったプログラム
- c. 100%未満だったプログラム



※プログラムごとの派遣学生数の詳細は別表1参照

(1-3) 交流プログラム(派遣)の進捗状況について (各大学のコメントより抜粋)

【達成目標に対し実績が上回っているプログラム】

○平成24年度は、環境工学分野の学生をアジア工科大学院へ、国際保健分野の学生をマヒドン大学及びインドネシア大学へ派遣した。これにより、学生は、環境工学及び国際保健の両分野において、人的ネットワークの構築、アジア都市・保健衛生分野における最新かつ実践的な知見を習得することができた。平成24年度の派遣数は、当初の計画数を遥かに超え、学生の留学への興味の高さがうかがえた。平成25年度は、単位互換制度を整え学生のニーズに答えるべく、交流枠を増加し、短期、長期共にプログラムの充実を図る予定である。(申請区分Ⅰ：東京大学)

○学部生対象のサマースクールを実施し、合計30名の本学学生をタイへ派遣した。
(申請区分Ⅰ：京都大学)

○本事業開始以前には文系での組織的な交流実績が少なかった、シンガポール、タイ、インドネシアなどASEAN地域の大学との交流を順調に展開しつつある。特に、シンガポール国立大学(哲学分野)・タマサート大学(経済学分野)での交流の拡大は単位互換の制度化を目指し、実現しているものである。(申請区分Ⅱ：京都大学)

○平成24年度に、ショートターム交流としてシンガポール及びタイへ本学の学生をのべ20名派遣した。また、ショートターム交流に参加した学生の中から成績優秀者を選抜し、平成25年度に学生交流を予定しているマラヤ大学、アテネオ・デ・マニラ大学及びフィリピン・サイエンス高校へのべ2人派遣し、本学担当教員とともに上記3校の担当者とプログラム策定について英語による意見交換を行った。当初、平成24年度の日本人学生派遣数を5人としていたが、目標数を大幅に上回る22名を派遣することが出来た。(申請区分Ⅱ：九州大学)

【達成目標に対し実績が下回っているプログラム】

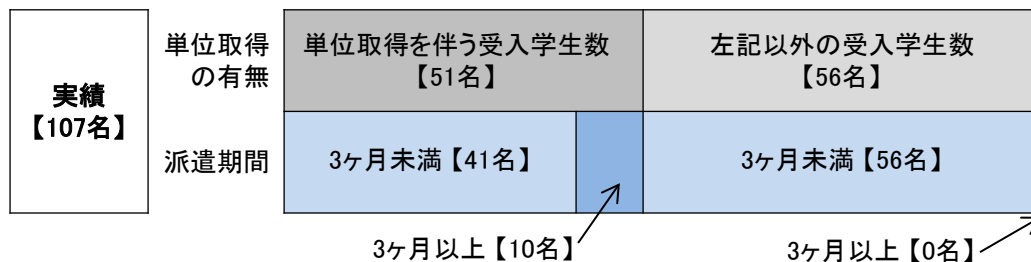
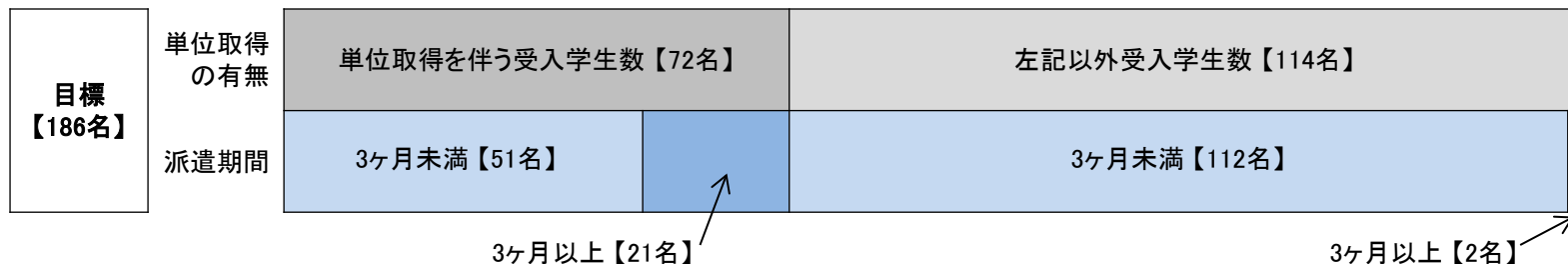
○平成24年度は、①ガジャマダ大学主催のKKNプログラム、②愛媛大学がインドネシア3大学と共同で行ってきた海フィールドにおける学生航海実習の2つのプログラムにて合計25人の学生派遣を計画していた。しかし、インドネシア側大学とのスケジュール調整の結果、実施時期が本事業の採択前となり、本構想における実績としてはカウントしていない。

(申請区分Ⅰ：○愛媛大学、香川大学、高知大学)

3. 交流学生数の実績(2)

(2-1) 交流プログラムで受け入れた外国人学生数(受入学生数)について【全体の状況】

達成目標に対する実績の割合は57.5%

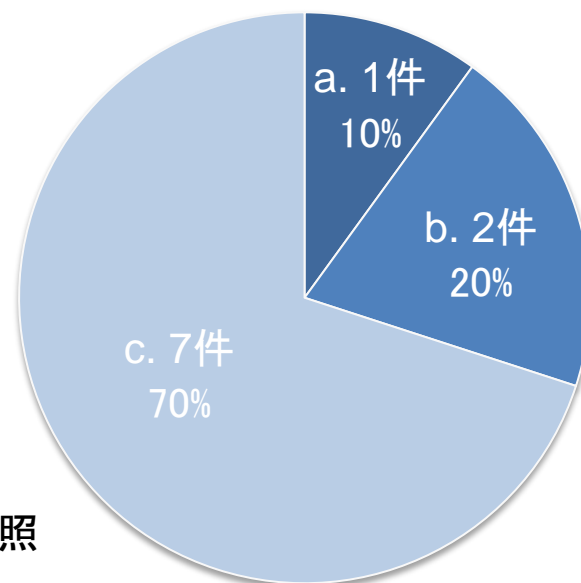


(2-2) 交流プログラムで受け入れた外国人学生数(受入学生数)について【各プログラムの状況】

達成目標に対する実績の割合が

- a. 200%以上だったプログラム
- b. 100%以上200%未満だったプログラム
- c. 100%未満だったプログラム

※平成24年度に受入計画のなかったプログラム(4件)を除く



※プログラムごとの派遣学生数の詳細は別表2参照

(2-3) 交流プログラム(受入)の進捗状況について (各大学のコメントより抜粋)

【達成目標に対し実績が上回っているプログラム】

○達成目標を受入実績が大きく上回った一方、単位取得を伴う受入学生数は計画を下回った。これは、単位付与にかかる問題が、各国の教育システム、各大学の認定制度や方法にも大きく関わるものであり、またプログラム開始時期が海外連携大学では年度の途中であったこと等から、海外連携大学とのプログラム実施についての意見交換、単位認定等に係る検討に時間を要し、速やかに対応することが困難だったためである。(申請区分 I : 東京医科歯科大学)

【達成目標に対し実績が下回っているプログラム】

○受入時期が日本の冬期であったことから、熱帯地域から渡日したインドネシア学生の就学環境としては厳しいものであり、インドネシア学生の数名が病気にかかり、一部のプログラムに参加できない状況が発生した。(申請区分 I : ○愛媛大学、香川大学、高知大学)

○平成24年度の実績については、平成25年1月にタイ(バンコク)で開催した国際シンポジウムによる学生交流やガジャマダ大学及びバンドン工科大学から1名ずつ個別にインターンシップを目的とする受入を実施した。タイで開催した国際シンポジウムに関しては、ASEAN各国の連携大学への周知期間が短かったため、当初想定していた受入人数を下回る結果となった。平成25年度は、この点について充分考慮した上で計画的に交流プログラムを展開しており、概ね目標値を達成している。(申請区分 I : ○九州大学、早稲田大学)

○シーナカリンウィロート大学との短期プログラムでの学生受入は年に2度実施の予定で、平成24年度の実績(8名)はうち1回分であるため、平成25年度以降は大幅に増える見込みである。今後の派遣人数増加に向けて、ASEAN協力大学との間で学部レベルでの交換留学協定の新規締結、また全学及び学部単位での短期プログラム開発を行っており、大幅に増加する見込みである。(申請区分Ⅰ:明治大学)

○平成24年度は交渉に時間を要し、5名の受入予定は実施に至らなかった。しかし、平成25年度には、インドネシアの5大学、タイのキングモンクット大学トンブリ校とチュラロンコン大学、ベトナム国家大学ハノイ校の計8校より、計画の20名を大幅に上回る84名の受入を実施した。(申請区分Ⅱ:千葉大学)

○初年度の受入数は、事業初年度ということもあり、受入に関する十分な準備・広報ができていなかったため、目標を下回った。平成25年度からは、双方向的な単位取得型プログラムをタマサート大学・シンガポール国立大学とのあいだで進めるほか、ASEAN地域の高水準の大学に重点を置いた受入を積極的に進めつつあり、初年度とは状況が変化している。

(申請区分Ⅱ:京都大学)

別表1:プログラムごとの派遣学生数(平成24年度)

(単位:名)

※各「目標」欄に数値が二つ併記されている場合は、以下の数値を示している。
 ・左の数値〔 〕なし
 =申請時の構想調書に記載した交流学生数+海外相手大学追加調書に記載した交流学生数
 ・右の数値〔 ()内]
 =申請時の構想調書に記載した交流学生数

	項目	合計人数		達成目標に対する実績の割合 (%)	(内訳)												うち、SENDプログラム該当者数		
		目標	実績		単位取得を伴う派遣学生数						左記以外の派遣学生数								
					(計)		3ヶ月未満		3ヶ月以上		(計)		3ヶ月未満		3ヶ月以上				
					目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	
申請区分Ⅰ	北海道大学	人口・活動・資源・環境の負の連鎖を転換させるフロンティア人材育成プログラム	13	17	130.8	13	17	13	16	0	1	0	0	0	0	0	0		
	東京大学	アジア都市環境保健学際コンソーシアムの形成	3	10	333.3	0	0	0	0	0	0	3	10	3	10	0	0		
	東京医科歯科大学	東南アジア医療・歯科医療ネットワークの構築を目指した大学間交流プログラム	18	19	105.6	5	2	4	0	1	2	13	17	13	17	0	0		
	京都大学	「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築	15	30	200.0	15	0	15	0	0	0	0	30	0	30	0	0		
	○神戸大学、大阪大学	ASEAN諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成	8	11	137.5	3	3	0	0	3	3	5	8	5	8	0	0		
	○愛媛大学、香川大学、高知大学	日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービスマスタープログラム	31	2	6.5	31	1	25	0	6	1	0	1	0	0	0	1		
	○九州大学、早稲田大学	地球資源工学グローバル人材養成のための学部・大学院ビルドアップ協働教育プログラム	40	37	92.5	15	15	15	15	0	0	25	22	25	21	0	1		
	慶應義塾大学	アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースドアプローチ大学コンソーシアム	20 (15)	7	35.0	5 (5)	0	5 (5)	0	0 (0)	0	15 (10)	7	15 (10)	7	0 (0)	0		
	明治大学	日本ASEANリテラシーを重視した実務型リーダー育成プログラム	50	17	34.0	45	17	40	13	5	4	5	0	5	0	0	0		
申請区分Ⅱ	千葉大学	ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)	40	39	97.5	40	39	40	39	0	0	0	0	0	0	0	0	40	39
	名古屋大学	ASEAN地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラム	12	11	91.7	0	0	0	0	0	0	12	11	12	11	0	0	12	11
	京都大学	「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成	42 (16)	92	219.0	0 (0)	0	0 (0)	0	0 (0)	0	42 (16)	92	42 (16)	92	0 (0)	0	8 (8)	55
	九州大学	スパイラル型協働教育モデル:リーガルマインドによる普遍性と多様性の均衡を目指して	5	22	440.0	5	20	5	20	0	0	0	2	0	2	0	0	5	22
	早稲田大学	「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業	0	19	—	0	19	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19
計		297 (266)	333	112.1	177 (177)	133	162 (162)	122	15 (15)	11	120 (89)	200	120 (89)	198	0 (0)	2	65 (65)	146	

別表2:プログラムごとの受入学生数(平成24年度)

※各「目標」欄に数値が二つ併記されている場合は、以下の数値を示している。

(単位:名)

- ・左の数値〔()なし〕
=申請時の構想調書に記載した交流学生数+海外相手大学追加調書に記載した交流学生数
- ・右の数値〔()内〕
=申請時の構想調書に記載した交流学生数

		合計人数		達成目標 に対する 実績の 割合 (%)	(内訳)												
		目標	実績		単位取得を伴う受入学生数						左記以外の受入学生数						
					(計)		3ヶ月未満		3ヶ月以上		(計)		3ヶ月未満		3ヶ月以上		
					目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	
申請区分Ⅰ	北海道大学	人口・活動・資源・環境の負の連環を転換させるフロンティア人材育成プログラム	13	18	138.5	13	18	13	18	0	0	0	0	0	0	0	0
	東京大学	アジア都市環境保健学際コンソーシアムの形成	0	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	東京医科歯科大学	東南アジア医療・歯科医療ネットワークの構築を目指した大学間交流プログラム	10	25	250.0	3	1	0	1	3	0	7	24	7	24	0	0
	京都大学	「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築	15	0	0.0	15	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	○神戸大学、 大阪大学	ASEAN諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成	3	3	100.0	3	3	0	0	3	3	0	0	0	0	0	0
	○愛媛大学、 香川大学、 高知大学	日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービスマーケティング・プログラム	28	19	67.9	28	19	19	14	9	5	0	0	0	0	0	0
	○九州大学、 早稲田大学	地球資源工学グローバル人材養成のための学部・大学院ビルドアップ協働教育プログラム	25	22	88.0	0	0	0	0	0	0	25	22	25	22	0	0
	慶應義塾大学	アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースドアプローチ大学コンソーシアム	16 (15)	4	25.0	0 (0)	0	0 (0)	0	0 (0)	0	16 (15)	4	16 (15)	4	0 (0)	0
明治大学	日本ASEANリテラシーを重視した実務型リーダー育成プログラム	50	10	20.0	5	10	4	8	1	2	45	0	45	0	0	0	
申請区分Ⅱ	千葉大学	ツイン型学生派遣プログラム(ツインクル)	5	0	0.0	5	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0
	名古屋大学	ASEAN地域発展のための次世代国際協カリーダー養成プログラム	0	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	京都大学	「開かれたASEAN+6」による日本再発見—SENDを核とした国際連携人材育成	21 (20)	6	28.6	0 (0)	0	0 (0)	0	0 (0)	0	21 (20)	6	19 (18)	6	2 (2)	0
	九州大学	スパイラル型協働教育モデル:リーガルマインドによる普遍性と多様性の均衡を目指して	0	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	早稲田大学	「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業	0	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計		186 (184)	107	57.5	72 (72)	51	51 (51)	41	21 (21)	10	114 (112)	56	112 (110)	56	2 (2)	0	